

特集「地域資源をどう生かすか ―私たちの提案―」

巻頭言

中村祐司（地方自治論担当教員）

前年度に引き続き 2 回目となるバーチャル出版企画の原稿が、ついに出揃った。今回の特集号のテーマは「地域資源をどう生かすか―私たちの提案―」である。市場ベースに乗らなければいけないだとか、継続性のあるものでなければいけないだとか、さらにはソフト面に限ったものでなければいけないといった制約は一切設けずに、また、地域資源の定義は何かといった議論も一切飛ばして、受講生が考えるところの具体的な素材を自由に挙げてもらい、各自が対象とした題材をめぐって伸び伸びと論を展開することを最も重視した。実際の現場との関わりについても、関係者へのインタビューや現地訪問などは義務付けず、各自の裁量にまかせた。原稿提出後の授業において、報告や意見交換の場を設けることも敢えてやめた。

ただし、唯一、こだわった点がある。

それは、個人の執筆内容を制限しない範囲で、執筆過程でできるだけ他の受講生の見方や考えから刺激を受けてほしいということである。そして、たとえ緩やかで曖昧であったとしても、グループ単位での意図や考えを読み手に伝えてほしいということである。全体があって個があるのではなく、あくまでも個があってそれらの組み合わせや重ね合わせが全体を構成するというスタンスを堅持したかった。個人が他者とコミュニケーションを図りつつ、そのことが個人の活字表現活動を後押しするような効果を生み出したかった。

その仕掛けの一つが、バーチャル編集長の選任である。2 人の編集長にはグループ討議の先導役となってもらい、グループ全体を見渡しての進行に従事してもらった。おかげで、原稿の最終提出までのプロセスにおいて、グループの各メンバーが他者の問題意識や執筆の進行具合などを共有できたのではないだろうか。

もう一つの仕掛けが、グループ毎に「はじめに」と「おわりに」を設けたことである。両方の執筆者は編集長以外として、また、両方を一人で書かないというルールを設定した。実は、問題設定（「はじめに」）と締め（「おわりに」）を別々な人が書くというのはかなりの難題である。しかし、このハードルをクリアできれば、グループ単位における個々の原稿は、読み手に混成物ではなく合成物として伝わっていくはずである。

それでは、2 つのグループ間での共有についてはどうか。この点については計 5 回に及んだグループ討議の各回の最後に、各グループで話し合った内容について編集長から報告してもらうことで補おうとしたが、残念ながらやり切れなかったというのが正直な実感である。今後の課題としたい。

以下の原稿は、いずれも上記のプロセスを経て生まれたものである。図や表、写真、イラストなどグラフィカルな提示は一切せず、受講生各自の熱意と努力が、オンリーワンの活字表現として凝縮されているはずである。

2014 年 1 月 20 日